

日本佛教学会 2013 年度学術大会（早稲田大学） 9 月 13 日（金）10：40－11：00
共同研究テーマ 信仰とは何か—教えの展開と実践—

『法華経』における教えの展開と実践（レジュメ）

岡田 行弘（東京大学）

釈迦仏の入滅後、「あなたはさとった」とか「仏になります」というという仏のことが与えられない時代が続いていた。成仏を目標とする仏教者にとっては、ブッダ在世の時代に行われていたように、現存する仏によって成仏が保証（授記）されなければならない。このような目的意識をもった出家者—『法華経』を説く仏—は、新たに経典を制作するという運動の一環として「東方世界」の仏教の伝統（とくに仏伝）を継承しつつ「刷新」という意図をもって『法華経』を構想した。

「序品」から「如来神力品」までの『法華経』の各品は、一切衆生の成仏と娑婆世界に現に存在する仏とを説き明かすために緊密に構成され配列されている。すなわち個別的な教義ではなく、仏が出現した目的という仏教の本質を自発的に説くことによって『法華経』が真の仏説であることを宣言する。同時に十方三世の諸仏が容認される時代において『法華経』を説く新たな釈迦仏は、衆生（仏子）を救う現実世界の正統な仏となる。『法華経』は経典が仏を創出する役割を果たすので、経典を実践することと仏を信じることは同義である。

一仏乗の教えは、その受容者（担い手）が『法華経』をどのように実践するかというテーマを中心として、順次展開されていく。すなわち仏滅後の世界にはじめて言及する「法師品」において、経典の一偈一句でも受持する者への授記に続き、経典を受持・読・誦・解説・書写するという五種の実践が説かれる。また「寿量品」で久遠仏が開顕されると、以下それを受持する功德が莫大であることが強調される。こうして『法華経』のいわば内部世界での教説の展開は、神力品までで一つの実践の体系として完結する。

それでは、外部の世界、すなわち『法華経』が成立した西北インドの仏教世界において、法華経者は一仏乗の展開と実践をどのように行ない、流通しようとしていたのであろうか。それを物語るのは「薬王品」から「普賢品」までの巻末（経末）六品である。これら諸品（いわゆる第三類）は、付録的な位置にあると見られてきたが、『法華経』が周辺の仏教内外の信仰と接触した時、それらを『法華経』の実践形態としてどのように摂取し統合していったかということ物語る重要な資料となっている。これら諸品によって『法華経』の実践が外部に開かれたものとなるのである。

〈キーワード〉『法華経』の実践。受持。五種法師行。巻末六品。